

第66回神奈川会イベント 報告

JARP
神奈川会

川崎日本民家園&岡本太郎美術館見学

好天が続いた十一月にあって、その日だけが予報の雨曇マークが取れませんでした。天を味方につけ曇晴で当日二十七日を迎えることができました。寒さの警鐘もそれほどではなく、一名の方の欠席ありましたが、参加頂いた方もあって二十一名が向ヶ丘遊園駅に到着、蜜を避けるため、三々五々駅を離れ、徒歩十五分の日本民家園に向いました。人も疎

らな入口のビジターセンターで神奈川会会長の挨拶、フェースシールドに身を固めた幹事からの詳細説明と葉の配布がありました。コロナの影響もあってボランティアの方の説明も中止になり、藍染体験も人数を絞られたこともあり参加申込を諦めました。内容の理解が音声ガイドアプリと葉だけとなったことが不安でした。



まずは常設展示場で古民家に関する基本的知識を学び、見学を開始、まずは原家住宅の壮大で豪勢な民家に圧倒されましたが、これは明治末期の豪農の民家で木造建築の粋を集大成した近代が生み出した貴重品です。展示がすべて近世（江戸時代）の制限された建築行為によるものだが、その技術が開花したわけである。



最初が宿場の民家三棟（奥州街道の馬宿、奈良市の商家、伊奈宿の商家）、次が信州の村で巨大な水車小屋（稼働中）、千曲川沿いの名主の農家、そして圧巻が四棟の合掌造りでその巨大さとユニークな建造方式（チョウナ梁・カンザシ・叉首）は豪雪地帯に生きる人達の工夫と努力によるもので大変感銘を受けました。

合掌造りの一軒が蕎麦屋を営業しており、大多数の方はそこで昼食、中は暗く、広い窓が開放されていてその明暗のコントラストが何か郷愁を呼び起こす雰囲気がありました。また一帯がメタセコイヤの林に囲まれその黄色の紅葉が、モミジの赤と常緑樹の緑との絨毯模様を織りなしたとても都会の真中とは思えないほどの景色でした。ここで記念撮影。



午後からは、先ず関東の村、大規模な分棟型の漁家と農家が二棟、地理的にも年代的に近いので、面白い比較ができました。次の神奈川の村の四棟は何れも17世紀後半に遡り、特に北村家は建築年代が特定された（1687年）重要文化財である。最後の東北の村の一棟は山形県の豪雪地帯の「ハツポウ造り」の農家で合掌造りとの異同が面白い。殿を飾るのが伊勢志摩半島の「船越の舞台」で大規模な歌舞伎舞台は漁村のものとしては珍しい。

途中で「健脚組」と「脚の悪い方」に分かれ、後者の方々は下り坂とエレベーターの利用で早く着き、優雅にカフェテリアで一服されていました。健脚組は十三人（私の暗算によると平均年齢 77・5 歳）、最後の急峻な百数十段を楽々踏破されたのは驚きでした。



岡本太郎美術館は入場者も少なくゆっくりと鑑賞できました。入口の巨大なモニュメント「母の塔」は万博でお馴染みの「太陽の塔」のインパクトには及ばないものの迫力は満点です。原色でほとばしる生命の躍動感の絵はコロナを吹き飛ばす力を与えてくれました。ただ盟友クルト・セルグマンとの抽象画は画才に欠ける私には難しいものでした。

2 時半に美術館の前で解散、特に二次会は設営せず皆様静かに帰路につかれたと思います（?）。コロナを一時でも忘れることができたのは良かったとの声がありました。

文 章	中井 順一	
写 真	木村 一雄	富山 友次
編 集	富山 友次	